文学にみる病いと老い

Serialization 96

文=長井苑子・注記=泉　孝英

グレアム・グリーン「第三の男」

小津次郎訳。グレアム・グリーン全集第11巻（1979年9月早川書房刊）所収の「第三の男」が文庫本化され，グレアム・グリーン・セレクションとして，2001年早川書房刊行。

作家のロロ・マーティンズは，友人のハリー・ライムに招かれて，第二次大戦終結直後のウィーンにやってきた。だが，彼が到着したその日に，ハリーの葬儀が行なわれていた。交通事故で死亡したというのだ。ハリーは悪辣な闇商人……。納得のいかないマーティンズは，独自に調査を開始するが……。

（文庫本カバー裏表紙より引用）

今年は，第二次世界大戦[*1]が終わって71年目である。現代史[*2]を高校できちんと教わっていたわけではないが，大戦前後の欧州の状況は，本や映画である程度のイメージを持っている。

なかでも，爆撃で廃墟同然と化したウィーン[*3]を舞台とした『第三の男』は，実は，本よりも映画のイメージが強い。趣味のギター[*4]仲間とアンサンブル[*5]を組んだとき，主題曲みたいなものを何にするかが問題となったとき，反対なく決定したのが，アントン・カラス[*6]のチター[*7]の演奏で有名になった『第三の男』であった。

ペニシリン[*8]の水増し薬液を闇市で売りつけて，小児をはじめとする多くの人々の命をうばった悪党「ハリー・ライム」といえば，あのオーソン・ウェルズ[*9]の容貌が浮かんでくるし，彼の友人のアメリカ人「ホリー・マーティンズ」は，ジョセフ・コットン[*10]の顔しか浮かばない。本よりも映画の印象が強すぎる作品である。

『第三の男』の本の作者グレアム・グリーン[*11]も，はじめから映画を意識してウィーンの現場を歩き，作品を書き上げ，キャロル・リード[*12]監督と十二分に討論しつくしての映画化だったようである。作者自身も，映画は小説の完成品だと表現している〔注：小説は映画公開（第3回カンヌ映画祭，1949年9月）後，1950年に刊行された〕。

英，米，仏，ソの4ヵ国によって分割統治されていた混乱期のウィーンで，『ペニシリンという特効薬が，水増しされて売られたこと，そして被害がおこったこと』は事実であるらしい。この非人道的な行為を背景とした戦後のウィーンの闇市[*13]，当時の医療状況をキーワードとしたこの映画は，不滅の第一級サスペンス[*14]といえる物語である。

物語は，ロンドン警視庁[*15]からウィーンに派遣されてきていた「キャロウェイ大佐」の語りによって展開していく。

映画ではホリー・マーティンズと呼ばれている男は，小説ではロロ・マーティンズという名前の35歳の英国人である。友人のハリー・ライムから仕事があるといわれてウィーンまでやってきたが，ハリーが事故死したとの情報を得て，あわててウィーンの中央墓地[*16]の葬儀にかけつけるところからこの物語ははじまる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

登場人物をまず簡単に紹介しておきたい。

［ソ連地区の住民］

・ハリー・ライム：悪党，この物語

SAMPLE

Copyright(c) Medical Review Co.,Ltd.